

ビブリオバトルを通して コミュニケーション能力と知的好奇心を養う

Developing students' communication ability and intellectual curiosity through Bibliobattle

石川県立大学 教養教育センター 新村 知子
生産科学科 鈴木 正一
環境科学科 高瀬 恵次・長野 峻介

1. はじめに

学生の力をどのように育てたらいいかというのは、全ての教員の永遠の悩みである。それに加えて、教員が決まった答えを教えるのではなく、学習者が答えを見つけたり、グループの中のメンバー同士でコミュニケーションをはかったりしながら知を再構築してしていくことが教育の目標となる時代になってきた。今までの講義型授業の中で育ってきた我々教員には、この変化しつつある教育目標のもと、どのように自分の教育スタイルをシフトしていけるかが大きな挑戦になるだろう。

これに対応するものとして、プロジェクトや課題を中心にした授業、IT を駆使した授業（反転授業など）をはじめ、さまざまな教育形態が世界中で試されている。その手法はいろいろあるが、これに対応するものの一つとしてビブリオバトルが注目されつつある。

ルールは極めてシンプルである。各自がおすすめの一冊を持ち寄り、5分間でそれを紹介するプレゼンを行い、その後2、3分の質疑応答の時間を設ける。発表者全員がプレゼンを終了したら、参加者全員で「どの本が読みたくなったか？」を基準として投票を行い、最多票を得たものを『チャンプ本』とする。学生が本を持って集まれば、いつでもどこでも開催することができる。

この活動が「読書推進運動」やプレゼンのト

レーニングかと考えれば、そうとも考えられる。けれど、何度か続けて参加する学生たちの姿を見ていたら、彼らの表情や目の輝きが違ってきて、そういう要素は彼らの成長のほんの一部でしかないということに気づく。ほんの小さなグループでやっていることなのだが、はじめは、「人前でうまく話せるだろうか」という緊張で萎縮しているだけの学生たちが、他の学生たちのプレゼンに刺激され、お互いに質問をし、興味を持つ分野が広がり、心が少しだけ外側に向いていく。自分の心が動いたその内容をいかに伝えていくか—チャンプ本争奪ゲームだけではない何かがそこにある。

教育者が目指すべきものは、自分で考え、答えを模索し、人とつながり、社会に貢献できる人材を育てていくこと。シンプルで、本当に小さな場であるが、ビブリオバトルで学生たちの何かが目覚める、その瞬間を大切にしたい。

2. ビブリオバトルとは

ビブリオバトルは、2007年京都大学大学院情報学研究科に所属していた谷口忠大氏が自分の研究室で勉強会として実施したことから始まった。研究発表会、論文紹介、輪読会などが当時の勉強会としては典型的なものだったが、谷口氏は発表者だけが準備をしてきて、残りのメンバーはただ座っているという受け身な形の会にするのを避けたいと考え、全員が本を

読んできて発表者になるという形を考えた。また、スライドやレジュメを読むだけという発表が多いという問題を回避するため、スライドやレジュメを原則的に禁止するという方向性が出たという。また発表者の準備が不十分なために発表がだらだらと続くということを守るために、発表時間は5分という制限を加えた。この基本方針は今でもビブリオバトルの公式ルールとして残っている。この新しい勉強会の形式は、谷口氏が研究室を出た後も残ったメンバーによって継承され、それが2009年から大阪大学の科学コミュニケーションを扱う組織 *Scientthrough* に取り上げられた。2010年には、実施していたこれらの組織のメンバーたちがビブリオバトル普及委員会を発足させて、現在も運営されている（谷口.2013.104-126）。

この後、大学やサークルの閉ざされたコミュニティで行われていたビブリオバトルは、2010年夏に紀伊國屋書店本町店（大阪市）で行われ大好評を得たことをきっかけに、さまざまところへ広がっていった。この年はたまたま、「国民読書年」だったということで、「言語力」の向上を通じて、世界で活躍できる人材を育成するために、東京都は「『言葉の力』再生プロジェクト」（リーダー：猪瀬直樹都副知事（当時））をスタートさせており、ビブリオバトルに注目した。そして急遽、この年の11月にビブリオバトル首都決戦（参加者400名）が実施されたのである（同書.173-178）。この催しは、これをきっかけに毎年開かれるようになり、2014年には決戦の場所を京都に移して、全国大学ビブリオバトル2014～京都決戦～となった。この間、ビブリオバトルは全国の大学、公立図書館、書店、企業、小中高等学校などで少しずつ広がりを見せている。

現在のビブリオバトルの公式ルールは以下のようになっている。

【ビブリオバトル公式ルール】

1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
2. 順番に一人5分間で本を紹介する。
3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。
4. 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。

(<http://www.bibliobattle.jp/>)

3. 本学における過去のビブリオバトル活動

本学では2009年から学生有志と教職員が協働して行う Reading Book Project (RBP) という読書推進運動が行われていたが、2013年10月にこの活動の一環として初めてのビブリオバトルが開催された。RBPの参加者ほとんどが参加し、20名がバトラーとなって予選および決勝を行った結果、『浜村渚の計算ノート』（青柳碧人著）がチャンプ本、『99.9%は仮説』（竹内薫著）が準チャンプ本となった。これは、ビブリオバトル北陸ブロック地区決戦、そしてビブリオバトル首都決戦2013の予選会にもなった。

この二人が11月に石川県政記念しいのき迎賓館で開催された北陸ブロック地区決戦へ出場したが、残念ながら首都決戦へ進むことはできなかった。また、本学の Reading Book Project (RBP) はこの年度で終了したが、その一環として行われたビブリオバトルが2014年度に新たな形で以下のように開催されることとなった。

4. 本年度のビブリオバトル

前期

前期は、参加呼びかけに応じてくれた3名の学生との話し合いから始まった。「‘ビブリオバトル’って何？公式ルールは？」(5月8日参加4名)、参加学生の読書歴、興味のあるジャンルなどについて意見交換(5月15日参加4名)、「とりあえずやってみよう、対象とするジャンルは？」、「メンバー以外に誘ってみる範囲は？」(5月22日参加5名)、参加予定者(バトラーと見学者)の確認と当日の進行予定(6月13日参加3名)など、準備段階を経て非公開のビブリオバトルを2回実施した。

1回目 6月26日(木) 参加8名

本部門のみで実施され、4名のバトラーが参加し、『夜は短し、歩けよ乙女』(森見登美彦著)がチャンプ本となった。

2回目 7月17日(木) 参加者6名

ジャンル制限無しで実施され、6名のバトラーが参加し、『生殖医療はヒトを幸せにするのか』(小林亜津子著)がチャンプ本となった。

後期

後期は、このメンバーだけでなく大学全体で参加者を募集し、以下のように5回のビブリオバトルを実施した。

1回目 10月6日(月) 参加13名

今年度初めての公開ビブリオバトルはマンガと本の2つの部門に分けて実施され、マンガ部門では6名、本部門では7名のバトラーが参加した(写真1)。出場者と観覧者による投票の結果、マンガの部門では『式の前日』(穂積著)、



本の部門では『名作アニメの風景 50』(アマナイメージズ・アフロ 著)がチャンプ本になった。そして、本の部門でチャンプ本を得た学生が10月19日に四高記念文化交流館で行われた全国大学ビブリオバトル北陸ブロック地区決戦へ出場することになった。

2回目 10月19日(土) 本学からの参加 8名

全国大学ビブリオバトル2014北陸ブロック地区決戦(石川四高記念文化交流館)に本学代表1名が参加。見学・応援に本学から7名が参加した。北陸ブロックの各県内予選を勝ち抜いた7名がバトラーとして参加し、富山県立大学の学生が紹介した『来たれ、野球部』(鹿島田真希著)がチャンプ本に選ばれ、全国大会への切符を手にした。

3回目 10月25日(土) 参加22名(学外を含む)

響緑祭(大学祭)のイベントとして公開ビブリオバトルを開催した。6名のバトラーがプレゼンをし、地元の図書館職員など学内外から多くの参加者があった。この時のチャンプ本は『いのちをいただく』(内田美智子著)になった。熱心な学外の方からのコメントや質問も多く、学生たちはたくさんの刺激を受けたようだった。

4回目 12月20日(土) 本学からの参加9名
金沢大学との合同ビブリオバトル・両大学学生交流会を金沢大学中央図書館にて開催した。本学からはバトラー4名が参加し、金沢大学の学生とのビブリオバトルを行い、本学の学生が『蜘蛛女のキス』(マヌエル・プイグ著)でチャンプ本を得た(写真2)。

5回目 1月15日(土) 参加 15名
今年度最後のビブリオバトルには、バトラーが6名参加した。この時のチャンプ本は、『Batman Mad Love』(Paul Dini 著)になった。ビブリオバトルを初めて観るといふ学生が3名参加した。

5. 金沢大学との共同教育プロジェクト

今年度、金沢大学と共同で「平成26年度金沢大学と石川県立大学との教育研究活動」としてビブリオバトルを用いた共同教育プログラムを行った。本学からは4名の教員が、また金沢大学からは大学教育開発・支援センターの青野透教授、堀井祐介教授、杉森公一准教授、久保田進一特任助教、人間社会研究域歴史言語文化学系の古畑徹教授が参加した。金沢大学では、専門教育の一環として金沢大学の人間社会学域共通科目「大学・学問論」においてシラバスに明記した上でビブリオバトル実践を行った結果、予習時間が増えるなどの効果があったそうである。

両大学が共同で参加した最初の活動は、上記で述べた全国大学ビブリオバトルの予選への参加である。ただ、残念ながらどちらの大学の学生もチャンプ本に選ばれなかった。

また、12月20日には、金沢大学中央図書館ブックラウンジにて、「石川県立大学・金沢大学合同ビブリオバトルと両大学学生交流会」を開催し、金沢大学からは2名、本学からは4名のバトラーが参加し、このときは本学の環境科



学科の3年生がチャンプ本に選ばれた。その後、学生たちは金沢大学のキャンパスを散策し、学生食堂で昼食を食べながら交流を深めることができた。参加者アンケートなどによれば、本学の学生たちはこの交流活動に強い印象を受け、とても充実した活動だったと述べている。普段、小さな大学の中で学生生活を過ごしている本学の学生たちにとっては、他の学生たちも見守る金沢大学のオープンスペースにおける公開のビブリオバトル開催は、専門領域の異なる大学間連携の必要性を確認することができたという点で意味があった。

6. 全国大学ビブリオバトル報告

本学の学生が予選会・地区大会に参加した全国ビブリオバトル2014～京都決戦～が、12月14日に京都大学百周年時計台記念館にて開催され、各地で開催された予選会・地区決戦(計873名参加)を勝ち抜いた30名の大学生・大学院生が出場した。

まず30名の参加者は5グループに分かれ準決勝のビブリオバトルを行い、各グループで選ばれたチャンプ本の発表者5名があらためて決勝の舞台でプレゼンを行った(写真3)。決勝でのグランドチャンプ本には、九州地区代表の北九州市立大学の学生が紹介した『ペナンブラ氏の24時間書店』(ロビン・スローン著)が選

ばれた（写真4）。北陸ブロック代表の富山県立大学の学生は惜しくも準決勝での敗退であった。

全国大会の様子はメディアでも大きく取り上げられ、大会中のエキシビションのトークセッションや決勝のディスカッションには、京都大学名誉教授の佐藤文隆氏、タレントの真鍋かをりさん、芸人の哲夫（笑い飯）さんが加わるなど、盛大な大会であった。予選会・地区大会で



はチャンプ本を選ぶ観覧者は学生や大学関係者が主であったが、全国大会では注目度も高く一般の観覧者も多数参加しており、より多様な観客を惹き付けるプレゼンスキルやパフォーマンスが要求される大会であった。

全国ビブリオバトルの開催に合わせて、前日12月13日には立命館大学朱雀キャンパスにてビブリオバトルシンポジウム2014が開催された（写真5）。パネルディスカッションやポスター発表では、学校教育、地域コミュニティ、図書館など様々な現場での実践事例や取り組みなどが紹介された。ビブリオバトルを通じてプレゼンテーションのスキルアップのみならず、自己実現、知的好奇心や探究心の向上、コミュニケーションの円滑化など様々なビブリオバトルの機能性や可能性が発表、議論されていた。

7. 参加学生からの声

1月15日に今年度最後のビブリオバトルを実施した時に、参加した学生全員から今年度のビブリオバトルに参加した感想を聞いた。継続して参加してきた学生もいれば、今回初めて参加した学生もいた。その内容は、以下の通りである。

- ・何回かやってみて、緊張しないで話せるようになったので、話す練習になったと思う。
- ・何回やっても慣れないけれど、ビブリオバトルを見に来るだけで、なぜこの本を選んだのかとか、話し方とか、いろいろ参考になる。
- ・普段は本を読まないけれど、ここに来ると本を読みたいなという気持ちになる。
- ・マンガの紹介を聞いて、自分では読まない新しいジャンルの本を読んでみたくなった。
- ・人前で話すのが苦手だったが、やってみてよかった。金沢大学でやったのは特に良かった。
- ・今までマンガしか紹介していないが、次回機会があれば、活字の本を紹介したい。

- ・自分の紹介したい本を語る機会がないので、とても良い。自分が読まないジャンルの本について話を聞くのがおもしろい。
- ・何回か参加してコツがわかってきたので、次はチャンプ本をゲットして賞品をねらいたい。
- ・前回うまく行かなかったので、次回リベンジしたい。

こういう学生たちのコメントを聞くと、継続してやってきたことで彼らの中の何かが変わったことが感じられる。スタート時は決して気持ちが外に向けて何かにチャレンジしたいということと言うタイプの学生たちではなかったのだけれど、何回か人前で本について語る、つまり自分について語ることを繰り返すことにより、自分の思っていることを人に伝えることの意味を感じ、それに充実感を感じるようになったようだ。

参加者たちは、本について語る他のメンバーの話を聞くうちに、本や人に興味を持ち、内容について質問をし、その答えを得るという経験を積みながら、自分の知らない世界について積極的に新しい情報や視点を取り込んでいくという形で確実に成長していったように思う。

8. 参加教員からの声

鈴木 正一

参加メンバーが一新したため、経験の継承もなく不安なスタートであった。参加学生とフランクに話し合える場と雰囲気作りが必要と考え、「『ビブリオバトル』って何?」、参加者の読書歴や興味のあるジャンルなど、様々な話題について話し合う機会を設けた。その間、「次の回にはできるだけ友達を誘おう」ということになり、次第に参加学生数が増加した。1～2回参加してその後参加しなくなる学生や常にバトラーとして参加する学生など、参加形態も

様々であった。

出入り自由でルーズな参加形態にもかかわらず（ルーズな参加形態だからこそ?）、上記「学生からの声」にもあるように、参加学生は「何かに気づき“何かを学ぶ”ことができたのではないだろうか。主体的に活動することの重要性を再確認させられた。一方で、自分自身が紹介した本がチャンプ本となったことは一度もなく、単に世代間ギャップや興味・関心の持ち方に起因することとは考えられない。‘学生に読んでほしい本’を紹介するといった、上から目線の紹介ではなかったであろうか、と反省しきりの昨今である。

新村 知子

ほとんどの学生たちは「話すのは苦手だから嫌だ」という。だからこそ、その苦手なことにチャレンジしてみたらと教員は思う。実際、私自身も若い時は話すのは非常に苦手で、人の目や反応を見て話すことができるようになるまで、何十年も掛かった。なので、学生たちがビブリオバトルへの誘いについて、あまり積極的に反応してこないことにも納得できる気がしていたのだが、一旦ビブリオバトルが始まってしまうと、話している時、聞いている時の彼らの目の輝きは尋常ではない。全神経を集中して、相手の様子を見ながら、何かを伝えようということに必死であり、脳がフル回転していることが感じられる。

これは、自分がトライしてみたときに分かった。やってみたら、そういう風にやる以外にビブリオバトルに参加することはできないのだと分かる。5分間、メモもスライドもなしで、聞き手に「何か意味のある話をする」というのは大変なことなのだ。今回は、参加教員が全員一度はバトラーになっているので、これはやるだけで大変なことなのだということを全員が身を持って体験していた。また、教員がやっても投

票でチャンプ本が決まるので、学生に勝てないことが多いという事実が、その難しさを物語っている。

加えて、ビブリオバトルが終わったあとの、学生たちの清々しい笑顔と、一気にお互いに打ち解ける様を見ると、こういう活動の大切さを改めて思う。「本を語る」ことは自分を語ることであり、そういう活動によって我々は社会とつながっていけるのかもしれない。

長野 峻介

現在の学生たちは、SNSを通じて自ら発信し、また他者の発信と共感し合うことを活発に行っている。ただし、共感を得やすい手軽な内容を発信することに慣れ、SNSはその手軽さゆえに一步踏み込んだ深い内容を発信しづらい環境であるようにも見える。ビブリオバトルは、自らが深く共感した（感動した、感銘を受けた、興味を持った…）本の内容やその自らの解釈を紹介し、それらを他者と共有することにつながる。各々一冊の本について取り上げるため、それなりに一步踏み込んだ内容について共有・共感しあうことになる。

1年間のビブリオバトルの活動を通じて、学生同士や教員との間でもSNSよりも進んだ相互理解やコミュニケーションが図られたように思われる。ビブリオバトルは「本を知り人を知る書評ゲーム」と言われる。ビブリオバトルを行うメリットとして、プレゼンスキルや教養知識の獲得について着目されがちであるが、知的にコミュニケーションを活性化する機能もあると実際に自らビブリオバトルに参加してみても体感した次第である。現在のところ、本学ではビブリオバトルはポケットゼミでの活動にとどまっているが、講義、研究室でのゼミ、サークル活動などでも気軽に行われ広く普及すれば、アカデミックなコミュニティの活性化につながると期待される。

9. おわりに

ビブリオバトル2年間の活動を振り返ってみると、あらためて主体的な取組の重要性と継続（経験の伝承・蓄積）の必要性を痛感させられた。学生のみならず教職員についても、何らかの活動を行う中で‘学び’‘学び合う’ことがある。本文中にあるように、北陸ブロック地区決戦や金沢大学との合同ビブリオバトルなど、日常的に属している集団以外の集団における活動が、学生にとっては新鮮で普段とは異なる‘学び合い’の場となっている。

年齢、所属集団などそれぞれ異なる多様な人々が、読書をとおしてお互いを理解し合う場がビブリオバトルであり、発表のスキルアップなど教育的には必要であるものの、副次的な効果と考えられる。

一方で、これからも読書に興味のある学生・教職員有志が、それぞれ読んだ本を持ち寄り、楽しくワイワイガヤガヤやっていく、そしてあるとき振り返ってみると、文章で表現したり、言葉では言い表せないが、ビブリオバトルを通して参加者それぞれが‘何か’を得ていた。そんな活動でいいのではと思う。

参考資料

谷口忠大. 2013. ビブリオバトル—本を知り人を知る書評ゲーム. 文藝春秋.

ビブリオバトル普及委員会編著. ビブリオバトル公式ガイドブック ビブリオバトル入門. 情報科学技術協会.

知的書評合戦ビブリオバトル公式ウェブサイト. <http://www.bibliobattle.jp/>